

家畜福祉と循環

このところ現場を訪ねる中で、何人かの元氣な農業者の口から共通して飛び出したのが「農業はおもしろい」という言葉であった。

一人が山梨県の昇仙峡の近くに養鶏場を持つ黒富士農場の向山茂徳さんだ。採卵養鶏で家畜福祉に力を入れ放牧を大幅に導入、あわせて有機JASの認証を取得して有機卵の生産も行っている。そして循環型の養鶏とするためBMW技術を活用して、鶏糞をたい肥に、尿を活性水に転換させている。また農場内の電線はすべて地下に埋設するなど、素晴らしい農場の景観をつくり上げている。

有機・農産加工・バイオマス

次が熊本県宇城市で有機農業や農産加工に取り組んでいる澤村輝彦さんである。有機栽培に取り組みの中で、栄養分が多いと病害虫が増えること、そして農産物のうまみは微生物をはじめとする生きものの数に比例することに気がつい

たという。こうした有機農業を個人だけでなく、地域の仲間たちとともに進めていくために（有）肥後あゆみの会を発足させた。試験圃場を設けて、有機農業の技術確立をはかり、さらには農産加工やバイオマスにも取り組んでいる。

戻って本格就農した。主に稲作は父親が分担し、松橋さんは野菜栽培を中心に、病害虫を減らしていくための混作であるコンパニオンプランツや地力を高めるためのカバークロープ等を積極的に導入してきた。

時流を読む

農業はおもしろい！

農的社会的デザイン研究所代表 蔦谷 栄一

CSAそしてITの活用

3人目が秋田県大潟村の米・野菜農家の松橋拓郎さんだ。松橋さんは就農3年目。大学を卒業して北海道美咲市のアスパラ農家のもとで農業研修を受けてから実家に

さらには市民を対象にしての日本酒プロジェクトや地元スーパーと連携しての料理教室等を開催するとともに、ITを活用しての情報発信やCSA（消費者と一体となつてつくる地域農業）に取り組んでいる。

おもしろいから頑張れる

いずれも果敢に自らが設定した課題にチャレンジしており、思いは熱く、エネルギーあふれる活動を展開している。

ところで農業の構造的な見直しが必要であるとして、攻めの農業による規模拡大、所得倍増が叫ばれている。担い手には確かに農地を集積し規模拡大してもらわなければならず、また一定以上の所得の確保が必要であることは言うまでもない。あくまで大規模化は経営の結果にすぎず、現場で必要とされるのはしつかりとした技術力や販売力、経営管理能力やリーダーシップである。そしてこれをもたらしものこそが、地域に対する誇りと愛着、農業が好きだ、おもしろいという熱意やセンスであり、3人の活動はこれを如実に物語っている。好きでおもしろいからこそ、エネルギーが湧き出し、こだわりとあくなき創意工夫も可能となる。霞が関も永田町も肝心なところには思いが至らないようだ。